「グローバル化時代の現代思想」若手ワークショップ
――ジャン＝リュック・ナンシー『フクシマの後で』から出発して――

報告

2013 年 2 月 23 日、東京大学駒場キャンパスにて東京大学 CPAG 主催／UTCP・東洋大学 IRCP 共催によるワークショップが行われた。

当日は会議室が超満員となるほど多くの来場者があり、活気のある議論が行われた。

まずは CPAG 研究代表者である中島隆博より CPAG のプロジェクト概要・目的に関する説明があった後、特に「若手」によるワークショップを行う意義についてオーガナイザーの柿並良佑（CPAG 特任研究員）から簡単に説明が行われた。

続いて本企画の端緒となった『フクシマの後で』の著者ジャン＝リュック・ナンシーから、「現在も続くカタストロフ」をめぐるメッセージが上映された（会場では日本語訳を配布）。

ジャン＝リュック・ナンシー（ヴィデオ・メッセージ上映）

続いて四名の登壇者による発表が行われた。

まずは東洋大学研究助手の渡名喜庸哲から、「破局の凡庸さ――ジャン=リュック・ナン

シー『フクシマの後で』の後で」と題し、現在の「ふくしま」の状況に関して、自身の見聞も踏まえた発表がなされた。

発表ではナンシーの言う「一般的等価性」の概念を安全問題の発生源の変遷と照らし合わせながら具体的に展開し、またヒューマン・ファクターの名のもとに人間が技術的環境に適応させられていく状況が浮き彫りされた。

またこれまで十分に吟味されてきたとは言い難い、ギュンター・アンダースやマルティン・ハイデガーといった思想家たちの言葉を検討しつつ、思考のプラクシスというナンシーの主要モティーフを我々がいかに引き受けていくべきか、という問いが提示された。

渡名喜庸哲

柿並良佑

続く柿並良佑の発表「「技術」への階梯――エコテクニーから集積へ」は、必ずしもまとまって形では提示されていないナンシーの技術論を描き出すべく、まずは技術について言及されたテクストから、技術と自然の対立という伝統的な構図を再検討する必要を取り出した。技術は技術に外在的な目的から判断・評価されてはならず、そのものにおいて問われねばならないというナンシーの問題提起を受けて、彼が或る時期に集中的に論じたエコテクニー概念を概観しつつ、それが『フクシマの後で』に収録された「集積について」と取り結ぶ関係について、ナンシーの共同体論・存在論とも関連するいくつかの問題点を指摘した。

＊＊＊

休憩をはさんで、UTCP 特任助教の星野太から「分有のための空間――ジャン＝リュック・ナンシーにおける存在論的「デモクラシー」」と題して、ナンシーの「政治」をめぐる発表が行われた。初期の「政治的なもの」についてから、近年の民主主義論に至るまでの議論を概観しつつ、民主主義と等価性の両義的な関係、「精神」としての民主主義など、いずれも慎重な検討を要する問題が提起された。ナンシーの議論をさらに展開するため、同世代の哲学者であるジャック・ランシエールの政治哲学との比較も試みられた。

星野太　　佐藤嘉幸

最後に筑波大学の佐藤嘉幸から「一般的等価性、集積、セキュリティ権力」と題する発表が行われた。ナンシーの用いる一般的等価性という概念が、たとえば軍事技術と民生技術の等価性といった具体的なレベルにおいて取り上げ直され、また集積という概念は核技術との共存不可能性のテーゼに展開された。続いて知と権力をめぐるフーコーの知見やジョン・W・ゴフマンによる放射能の研究を活用しつつ、被曝量を対象とした知と権力の関係が具体的に分析された。

＊＊＊

再度休憩をはさんで、質疑応答が行われた。

各発表者の内容をさらに掘り下げる質問から、原発・フクシマ問題にたいする哲学者の関わりについて、あるいはナンシーのテクストを読む意義について、さまざまな立場からの質問が寄せられ、いずれも白熱した議論に発展した。

（フロアとの議論の模様）

「若手」ワークショップと銘打ったことが功を奏してか、会場には若い学生と思われる人々の姿が多くみられた。また司会の好アシストも手伝って質問・議論にも積極的に参加していただいた。

最後に付言させていただくなら、「気軽な形で、しかし真摯な議論を」という当初の目的はひとまず達成されたように思う。オーガナイザーとして、本ワークショップに参加・協力してくださった全ての方に改めてお礼を申し上げたい。しかしこれは一つのイベントの終わりではなく、今後も持続されるべき議論の始まりにすぎないこともまた強調しておきたい。

（文責：柿並）